

生育が旺盛で葉腐病に強いノシバ‘グリーンバードJ’の育成

園芸試験場

1 背景と目的

現在本県で栽培されているノシバは、収穫後の再生が緩慢で年1回の出荷が難しく、消費者がシバを張った後もシバ地の形成に時間がかかる。そこで、生育が旺盛で揃いがよい品種を育成するため、県内各地からシバ系統を収集し、自然交配して選抜を繰り返した。その結果、在来系統より生育が旺盛で、緑化用のシバとしての形質に優れ、葉腐病（ラージパッチ）抵抗性が高い‘グリーンバードJ’を育成した。

2 成果の概要

(1) 育成経過

昭和59年より、県内各地から在来種や変異系統を50系統収集した。昭和61年より自然交配を開始して固定度の高い50系統を選抜した。平成5年よりランナーの生長量や開花数の年次変動から40系統を選抜し、平成12年からは葉腐病菌を接種して、耐病性の高い3系統に絞り込んだ。平成18年より露地ほ場で栽培し、定植1年目の株張りなどから実用性を評価して、平成19年の生産力検定を経て品種登録を申請した。

(2) ‘グリーンバードJ’の特性

- 1) ほふく茎や根の生育量が、在来系統（‘メイヤー’）の2倍以上と旺盛で、生産者は年1回の出荷が可能である。消費者は、シバ張り後、シバ地の形成期間が在来系統の約1/2に短縮できる。
- 2) 紅葉時期は在来系統より遅く、緑色保持期間が長い。
- 3) 葉長が在来系統に比べて短いことから、年間14～17回必要だった生産者のシバ刈り作業が半減でき、省力的である。
- 4) 葉腐病抵抗性が高く、葉腐病防除の省力化が期待できる。

3 成果の活用

現在、鳥取県芝生産指導者連絡協議会に属する8業者と‘グリーンバードJ’の栽培許諾を締結している。県は鳥取県芝振興ビジョンを作成し、平成26年度の‘グリーンバードJ’の作付目標面積を100ha(平成20年度ノシバ作付面積の約30%)としており、目標に向けてほぼ順調に栽培面積が増加している。

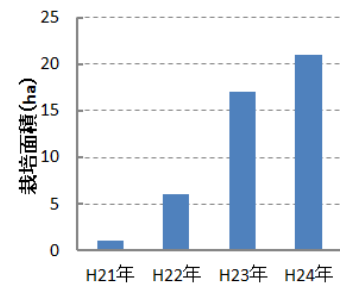


図1 ‘グリーンバードJ’の栽培面積の推移
(生産振興課調べ)

4 残された課題

最近多くの競技場では、従来の黒ボク土ではなく、砂質土壌で栽培された透水性の良い芝が好まれる傾向にあることから、‘グリーンバードJ’の砂質土壌適正を明らかにする必要がある。

また、知名度が低いことから、品種特性を踏まえた利用場面を検討し、利用者（取引先）向けに積極的なPR広報を行う必要があると考えられる。



図2 在来系統と‘グリーンバードJ’の比較
(定植100日後のほふく茎と根の様子)



図3 校庭芝生化への利用
(北栄町立大栄小学校)